K-7 片側巨脳症にみられるてんかんの臨床的脳波学的検討

岡山大学小児神経科¹⁾、同放射線科²⁾

大野 繁¹⁾、大塚 頌子¹⁾、岡 鉄次¹⁾
田中朗雄²⁾、平木祥夫²⁾

目的 片側巨脳症 (HM) は乳児期早期発症の難治てんか
んを伴うことが多く、特徴的な脳波像を呈することが知ら
れている。HM には一側半球全体の肥大を示す典型例の他
に、病変がより限局性の症例もある。そこで前者を HM I
群、後者を II 群とし、両群を比較検討し、両群の臨床的、脳
波学的特徴を明らかにしたいと考えた。

研究対象および方法 HM I 群 2 例と II 群 3 例、計 5 例
を対象に、臨床的、脳波学的、および神経画像的検討を行っ
た。

結果 発作初発年齢は I 群では生後 3 日と 1 ヶ月、II 群で
は生後 0 日が 2 例、7 日が 1 例であった。

てんかん症候群に関しては、経過中大田原症候群を呈した
症例は両群に各 1 例、West 症候群を呈した症例も、両群に
各 1 例であった。II 群の 1 例のみが経過中一貫して症候性
局在関連性てんかんに終始した。経過中に認められた発作
型は、II 群の 1 例では部分発作のみであったが、他は全例で
部分発作と tonic spasms、ミオクロニー発作などの全般発
作を合併していた。

脳波では全例基礎波に左右差または局在性徐波を認めた。
発作間欠時脳波では、経過中 I 群の 1 例を除く全例に
burst-suppression を、I 群と II 群の各 1 例に
hypersarhythmia を認めた。その他 II 群の 1 例を除く全例に、
alpha-like activity (Paladin, 1989) を、I 群の 1 例、II
群 2 例に triphasic complex (Paladin, 1989) を認めた。
MRI 上の異常は I 群では病変は半球全体に及び、後頭葉に顕
著であった。II 群では病変が前頭葉に限局したものが 2 例、
後頭葉から側頭葉にわたるものが 1 例であった。

結論 II 群は MRI 上病変がより限局しているが、臨床像、
脳波像は I 群と類似点が多く、乳児期早発の難治てんかん
を伴い、局在性病変であるにもかかわらず、全般てんかんに
きたしやすいことが特徴的であった。

K-8 有熱時けいれんにおけるMRI検査の臨床的意義に関する検討

市立枚方市民病院小児科¹⁾ 大阪医科大学小児科²⁾

田辺卓也¹⁾ 鈴木周平²⁾ 田上久樹²⁾ 若宮英司²⁾ 玉井浩²⁾

【目的】 熱性けいれんはheterogenousな疾患群であり、
中には周産期障害、発達異常、神経学的異常を持つ症例が
ある。その場合臨床的に複雑型熱性けいれんに分類されて
いるが、脳に器質的病変が存在するとき発熱で誘発された
てんかんと鑑別が困難な場合がある。今回、有熱時の発
作においてMRI異常所見を有する症例とMRI正常例とを臨
床的に比較することにより、熱性けいれんにおけるMRI検
査の意義を検討した。**【対象】** 38℃以上の発熱に伴い発作
を認めた症例で、中枢神経感染症などの急性脳侵襲に伴う
ものおよび無熱性けいれんを一度でも認めたものは除外し
た。MRI検査は発作症状、持続時間より主治医が必要と判
断した症例に行なっており、今回の対象は通常熱性けい
れんからは偏っている。A群；脳回の異常を認め、発作症
状および脳波所見よりそれが発作に関連していると思われ
る3例 (6か月-1歳)。B群；側脳室軽度非対称、クモ膜囊
胞などの所見を有するが、発作症状に直接関連する可能性
が低い6例 (10か月-4歳)。C群；MRI異常を認めない16例
(8か月-7歳)。経過観察期間は6か月から2年5か月。**【結
果】** 脳障害の既往はA群2例 (66%) B群1例 (17%) C群1
例 (6.3%)、神経学的異常はA群3例 (100%) B群1例 (17
) C群0例でそれぞれ認め、ともにA群で最も高率であっ
た。しかし、年齢、持続時間、発作型は各群間で大きな差
異は認めなかった。熱性けいれんの再発はA群1例 (33%)
B群0例 C群8例 (50%) で認めA群で特に高頻度というこ
とはなかった。熱性けいれんの家族歴はA群の全例に認め
た。A群の1例では発作間歇時に後頭部に棘波を持ち、遷延
性のけいれんを反復しておりてんかんと異なる問題とな
った。**【考案】** MRIでの所見は脳のlesionを反映しており
臨床的には脳障害の既往、神経学的異常と関連があった。
しかし、発作型、持続時間、再発頻度はMRIの所見の有無
で大きな相違は認めず、MRIにて異常所見を有することが
複雑型熱性けいれんとてんかんとを区別する根拠とはなら
ないと思われた。MRI有所見例もある年齢の期間、素因的
な背景に基づき熱性けいれんと考えられる臨床像をとっ
てると考えられた。